

季節や時の流れを感じる（環境） 刈谷市立刈谷幼稚園（愛知県刈谷市）

<研究の目標>科学する心を“五感を通して感動したことを追及しようとする心”としてとらえ、考える力を育むには、環境をどのように構成し、どのような自然体験に出会わせたらよいか、また、幼児とかかわる保育者は、幼児の心に揺さぶりをかけるには、どのように援助したらよいかを追究する。

[計画1]園内自然マップを作成し、自然や自然物がどこにどのようにしてあり、それを幼児がどのように使うとより効果的かを捉える。

春（4月～6月）の環境づくり

- ・昨年度、冬に植えた、キャベツ、大根などを収穫せずに、そのまま畑に残し、花が咲き、種ができるところまでの様子が見られるようにする。また、モンシロチョウが集まり、卵が産み付けられるようにキャベツを残しておく。
- ・5歳児の一人一鉢スイカ・プリンスメロンの栽培物を正門に続く場に並べ、登降園時に親子で観察したり世話をしたりできるようにする。また、年長児が世話をする姿やスイカ・プリンスメロンの生長を他の学年の幼児も関心を持って見ることができるよう、目に付きやすい場に並べておく。
- ・季節の野菜が収穫できるように夏は[トマト、キュウリ、ピーマン、ナス、トウモロコシ]秋は[サツマイモ]を幼児の目に付きやすく、世話しやすい場に畑を作って栽培する。
- ・大豆と黒豆の2種類の豆をまき、枝豆として収穫して食べるものと、種になるまで育てるものとを作り、枝豆と大豆、黒豆との関係が発見できるようにする。
- ・ピオラやパンジー、サクラソウ、ノースポールなどのいろいろな色の春の花をプランターで栽培し、ままごとコーナーや色水遊びのコーナーの近くに置き、幼児が自分で探して遊びに使ったり、試したりできるようにする。
- ・プランターの土をひっくり返したものを貯めておいたり、抜いた野菜や草などを畑に積んで置いたりすることで、幼虫やダンゴムシなどが棲める場となるようにする。



秋（9月～11月）の環境づくり

- ・園内にヨウシュヤマゴボウ、ジュズダマ、チカラシバ、オナモミ、ヌスビトハギなどの遊びに使える草花を植えておく。
- ・バッタ、コオロギなどの虫が集まる雑草園を作る。
- ・サルビア、マリーゴールド、ブルーサルビア、コスモスなどの秋の花をプランターや花壇に植え、遊びに使えるようにする。（蜜を吸う、色水を作る、ごちそうに見立てるなど）
- ・クヌギ、椎、サザンカ、ツバキなどの木の実を取ったり拾ったりできるようにする。また、ままごとやごっこ遊び、製作などで使えるようにしていく。
- ・イチョウ、サクラなどの紅葉を見たり、落ち葉を拾ったり集めたりできるようにする。
- ・アサガオ、フウセンカズラ、ニガウリ、ルコウソウなどのグリーンカーテンを種取りができるまで置いておく。



[計画2]四季を通してどんな自然現象が起こるか、どんな自然体験ができるか押さえ、それを生かした遊びを開発したり環境を整えたりする。そして、その中で幼児がどんなことを体験し、何が養われるかを明確にしながら実践を進め、保育者の援助のあり方を追求する。

長期間飼ってきたカブトムシを通して、季節の移り変わりや生命の不思議さを感じていく 10月下旬

春よりカブトムシを飼い、幼虫からサナギ、成虫となる様子や習性、食べ物や糞などに心を動かし命の不思議さを感じたりしてきた。その飼育と共に季節の移り変わりも感じてきたと思われる。成虫の死を経験し、幼虫やカブトムシが見えなくても、新たな幼虫の誕生など、今後の姿に期待したり、関心をもてたりするように、机の上に表示をつけて置いておき、保育者は常にカブトムシの状態を把握しておいた。

秋の木の实や枝を探しに椎の木屋敷跡へ園外保育に出掛けると、A児とB児は、シイの実やサザンカの実を集めていたが、森の方へ行くとたくさんの枝を見つけ、B児「あっ、これカブトムシが好きな木だ」と直径8cmほどのごつごつした木を持って言った。A児は「本当だ」と保育者に見せに来た。保育者が「本当だね。ごつごつしてカブトムシが好きな木だね」と言うと、保育者の側にいたG児が「でも、もうカブトムシはいないんじゃないか？」と言う。B児「好きな木があったら出てくるかもしれないじゃん」、A児「そうだよ。秋になるとカブトムシは死んじゃうんだけど、新しいカブトムシが生まれてくるんだよ」と言うと、G児も「本当？」と尋ね、幼稚園に戻ると早速飼育ケースの中に枝を入れた。

（1週間後）ふたを開けてみると、木がスカスカになっていた。A児は「先生、すごいよ。木がなくなっている！」と目を大きくして驚いた表情で言って来た。保育者が「本当？」と言い、すぐにB児・G児らと見に行くと、直径8cmほどもあった木が空洞になっていた。A児が「ねっ！ほらこんなになっているんだよ」と言うと、G児は「すごいね。本当にカブトムシがいたんだ」と感心したように言い、そっと木をどかしてみた。すると幼虫が見え「あっ、幼虫だ！」「本当だ」「2匹もいる。まだ小さい！」と大きな声で言い、驚いたようなうれいような表情でしばらく見ていた。そして、G児が「じゃあ、もっといっぱい木を探してきた方がいいんじゃない？」と言うと、A児が「そうだ。水もあげなくちゃいけないんだ」と、B児も「そうだよね」と言い、霧吹きで水をかけ、園庭に木を探しに出掛けた。それから、毎日、腐葉土や幼虫の様子を見るようになった。

<考 察>

- ・ A児らは、カブトムシがいなくなっても蜜を探して季節によって蜜の硬さが違うことに気付いたり、園外で見つけた木からカブトムシを思い浮かべたりしている。
1学期から長期間に渡り自分たちで土を換えたり、えさを探したり、実際に見たり触れたりして心や体を動かしてかかわってきたカブトムシだからこそ親しみがあり、いなくなっても思い出し、自分の生活と絡めて季節を感じたり、取り入れたりしているのだと思う。保育者は、幼児がより充実した豊かな生活ができるように、幼児を取り巻く自然に常に関心がもてるような工夫をすることが必要だと感じた。
- ・ A児らは家庭でもカブトムシを飼っており、図鑑などの知識からカブトムシが卵を産むことは知っていた。しかし、実際に空洞になった木を見たり、小さな幼虫が動いているのを見たりした驚きや喜びは大きく、幼虫の誕生という不思議さに出会えたことで、更にカブトムシを思う優しさから、水やえさとなる木などを探す姿になったのだと思う。また、A児らは、カブトムシが幼虫からさなぎ・成虫・そしてまた卵から幼虫へと命がながっているという生命の尊さも感じられたと思う。5歳児にとっては、カブトムシが死んでしまったら終わりではなく、自分たちの手で長期間に渡り継続して飼育していくことが大切であると感じた。



みどころ

どの園も、園の実態と飼育栽培物の特徴を考慮し、計画的に飼育栽培活動を進めています。この園では、「季節感」というキーワードで飼育栽培の環境を考えています。この成果は、カブトムシがいなくなった環境でも、園の樹木からカブトムシがいた頃のことを思い出したり、カブトムシのいた木がスカスカになって朽ちている状況を解釈したりする姿に結びついています。幼児には難しい因果関係に考えが及んでいません。また、時の流れを幼児なりに感じながら興味をもって振り返り観察することで、新たに幼虫を発見し、幼虫のための環境づくりをしています。知識や経験を生かした意欲的な行動につながっています。